

松木満史研究のための序論¹⁾

和山大輔²⁾

An Introduction to the Study of Manshi Matsuki

Daisuke WAYAMA

キーワード：青森、洋画、白樺、松木満史

1 はじめに

松木満史（まつきまんし。1906（明治39）～1971（昭和46）年）は、青森県木造町（現つがる市木造）出身の洋画家である。本名を金七といい、地元の桶屋の長男として生まれた。早くから洋画に関心を示し、雑誌『白樺』を通して岸田劉生やヨーロッパの美術に憧れを抱くようになっていく。棟方志功の設立した「青光画社」の活動にも加わり、同郷の芸術家志望の若者たちと切磋琢磨しながら少年時代を過ごした。

1926（昭和元）年、松木は19歳で上京し、以後国画会を中心に作品を発表していく。画家としての実績を重ねていく一方、玉川学園中等部で美術の指導にも携わった。1938（昭和13）年、31歳で念願の渡仏を決行する。戦況の悪化と息子の死により1年半ほどの帰国を余儀なくされるが、フランスで得た経験は松木のその後の制作に少なからぬ影響を与えた。

フランスからの帰国後、松木は滞仏作品集の出版や青森、東京での個展の開催など精力的に活動を続けるが、太平洋戦争の開戦に伴い従軍画家として北支へ赴く。しかし従軍中に天然痘を患い、1944（昭和19）年に帰国することとなる。帰国後は青森に住んでいたが、終戦の年の11月に一家で再び上京した。

松木は2年後、家族を東京に残して単身青森へ戻り、堤川沿いにアトリエを建てて制作の拠点とした。この後十余年間、個展の開催や国画会等への出品を続け、1959（昭和34）年には第1回青森県文化賞を受賞した。しかしその後、脳溢血に倒れて療養を余儀なくされ、以後絵筆を握ることはなかった。1971（昭和46）年、松木は65歳で永眠する。

松木は戦前に油彩画の勉強のためにフランスへ渡った数少ない青森県出身の画家の一人であり、晩年には公的な表彰を受けてもいる。こうしたことから、松木は大正から昭和にかけて活躍した青森県の代表的な洋画家の一人として位置づけられている。しかし、同世代の棟方志功ら他の青森県出身の芸術家の陰に隠れてしまっているためか、これまで包括的な研究はなされていない。本研究は彼の画業の全体像を可能な限り明らかにし、青森県における近代以降の絵画史の一端を記述することを目的とするものである。本稿ではその始めとして、松木に関する先行研究をまとめた上で、研究の方針や今後取り組むべき課題について述べる。

2 先行研究について

松木の死後、その画業を最初にまとめたのは、松木満史画集刊行会による『松木満史作品集』である。本書は1973年に500部限定で出版され、松木の主要作品がカラー及びモノクロで紹介されるとともに、関係者の追想が掲載されている。その中には松木が師事した武者小路実篤が寄せた文章もあり、松木とその芸術に対して彼が抱いていた印象が綴られている。同世代の画家や教え子、あるいは家族の回想からは、松木が権力めいたものを嫌い、自らの芸術に対して一途であり、そのために厚い人望を得ていたことがわかる。また、本書には松木の年譜が掲載されており、彼の人生における主要な出来事と作品を概観することができる。

松木についてまとめた記述のある書籍としては、長部日出雄による棟方志功の伝記『鬼が来た』（1979年刊行）が挙げられる。棟方とその関係者らが織りなすこの物語の中で、特に松木は志功の親友もしくはライバルとして頻りに登場する。少年時代から青年時代にかけての松木は聡明で博学な人物として描写され、帝展入選を目指していた棟方に先んじて太平洋画展に入選を果たすなど、常に一步先を行く存在であった。また、松木が初めて油絵具を手に入れたときのエピソードが紹介されるなど、彼の若い頃の行動や人物像を知る手がかりを提供してくれる資料である。

こうした資料をもとに1991年に青森県立郷土館で開催された「松木満史とその時代」展の図録では、白樺派への傾倒、棟方志功との交流、フランス滞在、戦後の青森での制作など、松木の画業を振り返る上で重要な出来事がまとめられている。

この図録と同じ年に刊行された『津軽の美術史』は、松木の人物を伝える資料の一つである。本書によると、松木は上野の西郷隆盛像の下で「国展の松木満史を知らねえか」と怒鳴り散らしたり、藤田嗣治を三流だと言い放ったりと、かなり豪放な一面があったようだ。同時に、「本気で絵を描くつもりなら教職をやめろ」と後進の画家に指導するなど、彼の芸術に対する一途な姿勢が紹介されている。これらの資料のほか、『青森県史 文化財編 美術工芸』や『青森県史叢書 近現代の美術家』が松木に言及している。

以上の資料は松木の人物像や大まかな経歴を知る上で有益であるが、いずれにおいても彼の人生の各時期、あるいは個々の作品を掘り下げた研究は十分になされていない。今後は特定の時期や作品を対象を絞りながら、同時代の状況や関係する作品を参照しつつ、彼の画業を

1) 青森県の近代以降の絵画史に関する研究(1)

2) 青森県立郷土館 研究員（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

具体的かつ総合的に研究していくことが必要である。また各資料には年代や固有名詞、あるいは事実関係の誤りが散見されるため、研究の過程で新聞記事等の一次資料を参照しながら、それらを適宜修正していく必要もある³⁾。

3 研究の方針

先述のとおり、本研究の目的は松木の人生の各時期や個々の作品に焦点を当てた調査を積み重ね、彼の画業を可能な限り明らかにしていくことである。したがって、まず彼の人生をいくつかの時代に区分することが必要となるが、この点については松木の活動地域に基づいて次のとおりとしたい。つまり(1)木造・青森時代、(2)東京時代、(3)フランス滞在期とその前後、(4)戦時期、(5)堤川アトリエ時代の5つである。

(1) 木造・青森時代は、松木が生まれた1906(明治39)年から上京する前年の1925(大正14)年までの約20年間である。この時期、松木は『白樺』を通してフランス美術を学んだり、棟方が主宰した「青光画社」の活動に参加したりして画家としての素地を形成した。

(2) 東京時代は、上京した1926(昭和元)年から、美術教師として勤めていた玉川学園を辞した1936(昭和11)年までの約10年間である。上京後、松木は国展を中心に公募展への出品を重ねて画家としての実績を積み上げていく一方、結婚して子どもにも恵まれ、公私ともに充実した時期を過ごした。また、白樺派の中心人物である武者小路実篤と直接交流する機会を得るなど、人脈の面でも広がりを見せた。この時期の中盤、松木は玉川学園の美術教師の職を得て一時的に生活が安定するが、学園側との対立からここを去った。その後、念願の渡仏を実行に移すこととなる。

(3) フランス滞在期とその前後は、渡仏の準備のために青森に戻った1937(昭和12)年から、フランス滞在を経て再び日本で制作を続けた1943(昭和18)年までの約6年間である。松木は青森へ戻って県内数ヶ所で個展を開き、渡仏の資金を賄った。1938(昭和13)年7月に渡仏を執行するも⁴⁾、第二次世界大戦の開戦により翌1939(昭和14)年12月に帰国を余儀なくされた。松木はこの短い滞在のうちに、数点の油彩と多数のデッサンを制作している。帰国後はこれらをもとに個展の開催や公募展への出品を行っており、フランス滞在の成果を積極的に日本国内で発表している。また、青森市内で美術研究所を開き、指導者としての活動も行うようになった。

(4) 戦時期は、従軍画家として招集された1944(昭和19)年から1945(昭和20)年の終戦までの約1年間である。松木は当初2ヶ月間の予定で北支に赴いたが、北京で天然痘を患ったため期間を短縮して帰国した。従軍時のスケッチは数十点残されているが、それをもとに制作したとされる作品群は所在不明となっている。

(5) 堤川アトリエ時代は、終戦から1年が経ち、松木が青森市の堤川沿いにアトリエを構えた1947(昭和22)年から、病によりそのアトリエを去る1964(昭和39)年までの約17年間である。堤川のアトリエを新たな制作の拠点に定めた松木は、精力的に県内各地で個展を開催する。東京での個展も数回開催しているが、基本的に青森に根ざした活動をしているのがこの時期の特徴である。個展のみならず、同郷の古藤正雄や鷹山宇一らとともに「青生会」という団体を結成しており、このことから青森の美術界の活性化を図ろうという公的な目的意識が芽生えていることも感じられる。こうした活動と相まって、松木は1959(昭和34)年には第1回青森県文化賞を、次いで1962(昭和37)年には青森県褒賞を受賞し、画家としての業績が大々的に顕彰された。

本研究は、以上の時代区分に則って段階的に進めていくものとする。ただし、必ずしも時系列にこだわらず、先行研究等を参照した結果、重要であると判断される部分については優先的に調査を行っていく。以下では差し当たり、松木の初期から中期の大きな転換点となったと考えられる(1)木造・青森時代、(3)フランス滞在期とその前後について、主要な出来事を確認していきたい。

4 木造・青森時代について

この時期は松木の画業の出発点であり、自身が画家として進むべき道を見定める時期であった。

旧木造町の桶屋の長男として生まれた松木は、1912(大正元)年、6歳の時に地元の小学校に入学した。後に高等科へ進学するも、在学中に彫刻への思いを募らせ、11歳で中退している。息子の思いを汲んだ父の久助は翌年、松木を青森市寺町の仏師・本間正明のもとに弟子入りさせた。実家の商売がら、松木は幼い頃から木材に親しんでいた。そうした生活環境も手伝ってか、奉公して二日目に制作を命じられたお稲荷様を、二日かけて彫り上げることができたという。

木彫を続けるうちに、松木の関心は洋画へと向かっていった。仕事の合間に大観堂という地元の古本屋に通い、洋画の講義録を見つけてそのイメージをつかんだ。次いで画材を探し求めた彼はある日、新聞広告で大阪に画材商がいることを発見した。早速注文の手紙を送り、油彩画の道具一式を入手した。松木は後にそのときの感動を「天にもものぼるとは、このことでしょうか。たとえるものもない、まったく一生に何度も味わえるたぐいのものではありませんでした。これで描いたのが、私の洋画への旅の始まりです」⁵⁾と回想している。松木はこのときから本格的に洋画家を志すようになっていった。

松木が油絵の実物を見たのは1921(大正10)年のことである。この年、青森市で最初のデパートである松木屋呉服店が開店した。その記念行事の一環として、横内村(1955年に青森市に編入)出身で川端画学校に学んだ洋画家・山上喜司の個展が開催された。松木は棟方とともにこの展覧会を訪れ、洋画への憧れを一層強くしたという。

青森で木彫をしながら洋画への思いを膨らませていた松木は、1923(大正12)年、16歳の時に肋膜炎を患い、半年ほど入院することとなる。退院後は実家の木造で絵画、彫刻、音楽などの研鑽に励んだ。この研鑽の場のひとつとなったのが、葛西新八郎(1897(明治30)年～1926(大正15)年)が主宰していた木造の文化サークル「土曜会」⁶⁾であった。葛西は弘前市出身で、弘前中学を出たのち早稲田大学哲

学科に学んだ。白樺派に傾倒し、武者小路実篤のもとを訪れてもいる⁷⁾。

土曜会の参加者の一人であり、後に青森県知事となった竹内俊吉（1900（明治33）年～1986（昭和61）年）は次のように語っている。

工藤君と暮らしていたころ、木造町の葛西新八郎さんが中心となって文化サークルのようなものが出来て、私たちもこれに参加した。葛西さんは早稲田大学文学部を卒業した白樺派の文学青年だった。このサークルは、美術や音楽についても葛西さんの財力で外国製の美術集やレコードを取り寄せ、私たちにほしいへんありがたいサークルであった。ゴッホやロダンを知ったのも、このサークルのおかげであった。この木造の白樺サークルに、松木満史君は常連でいつも出席した…（略）…⁸⁾

この回想によると葛西が主宰する土曜会は、彼が学んだ白樺派についての知識を参加者に伝達する場として機能していたようである。16歳の松木は年上の先輩達に混じって、常連として熱心に会の活動に参加していた。

会の活動の様子については東奥日報紙が伝えている。1923（大正12）年5月から同年7月まで紙面には、土曜会の1月から6月までの活動の様式及び7月の活動予定が掲載されている。計14件の記事の中で、松木が登場するのは7月2日の最後の記事である。そこには以下のように記されている。

第六月土曜会は二日夜、木造町大神宮拝殿の一部を借りて寄り合った。葛西夫妻、工藤、藤川、松木（金）、松木尚、横山、津島の外に竹内医者さんも来られた。（中略）次に工藤氏の近作、一幕物「春愁」の朗読、及び松木金七氏の詩「静かなる夜」を葛西氏が朗読した。朗読の後で短い批評を交わした。詩の朗読の後で、また脚本をやることにした。ゴリキイ作小山内薫氏訳「夜の店」を次の役割で朗読した⁹⁾。

文中には松木が本名の「金七」で記されている。この記事によると、土曜会では白樺派についての知識の伝達のみならず、参加者による詩の創作や朗読も行われていたようである。土曜会に関する記事はこの日以降途切れているが、松木が常連であったという先の竹内の回想からすると、これ以降もしばらく会の活動は継続したと思われる。松木は文化的感度の高い地元の先輩達の指導を受けつつ、自らの感性を高めていった。

松木が土曜会に参加するようになった1923年には、もう一つの重要な出来事が起こっている。それは「新しき村」運動への参加である。「新しき村」とは、武者小路実篤が「人間らしく生きる」、「自己を生かす」社会の実現を目指して、1918（大正7）年に宮城県児湯郡木城町に設立した共同体である¹⁰⁾。武者小路の著作や講演を通して紹介され、各地に支部が作られた。

青森でこの運動に共鳴したのは、老舗呉服店の跡取りで後に衆議院議員となった淡谷悠蔵（1897（明治30）年～1995（平成7）年）である。淡谷は義務教育修了後に家業を継ぐが、商人としての暮らしに疑問を感じ、青森市郊外の新城で百姓暮らしを始めた。「新しき村」が開村された翌年の1919（大正8）年には、同地に「新しき村」青森支部を設立している。

この村に入村を願い出たのが松木であった。松木は淡谷に「どうかわたしを、ここで働かせて下さい」と土下座して頼み込んだという。しばらく淡谷の家に住み込んで畑仕事の手伝いなどをしていたが、やがて迎えに来た祖父に連れて帰られた。

この出来事の前年の1922（大正11）年には、10月1日から「新しき村」青森支部の主催で「泰西美術複製展覧会」が開かれ、11月8日には淡谷悠蔵の招きで武者小路実篤が来青して講演を行っている。この年、松木はまだ仏師見習いとして青森市内に居住しており、この美術展と講演会に足を運んでいた可能性は十分にある。複製画とはいえ原寸大のヨーロッパの美術を見て、『白樺』の主宰者の肉声を聞いた経験が、松木を翌年の大胆な行動へと駆り立てたのであろう。

このように木造・青森時代は、松木が画家として、あるいは一人の人間としての価値観を形成する上で重要な経験をした時期であった。

5 渡仏期とその前後について

松木は木造・青森時代の後、東京時代を経て渡仏を果たすことになる。東京時代については稿を改めることとし、以下では松木の渡仏周辺の動向を東奥日報紙の記事により辿ってみたい。1937（昭和12）年、松木は渡仏準備のために当時居住していた世田谷区の祖師ヶ谷から青森に戻った。

1937（昭和12）年8月8日

松木満史氏の個展

帰省中の洋画家西郡木造町出身松木満史氏の個展は来る十、十一日の両日青森市菊屋デパートで開催するが出陳作品は近作の油絵約三十点である

展覧会中の記事は以下のとおりである。

1937（昭和12）年8月10日

松木満史氏個展 けふから菊屋デパートにて開催

本県出身洋画家として中央画壇に活躍し、その質実な作風を以て認められている松木満史氏は今回帰郷したが、これを機会に多年念願の巴里行の経費の一端を得べく両三年間の収穫である作品の展覧会を十日より二日間青森市新町菊屋デパート三階ホールに於いて開催することになった、出陳作品は四十点内外で一般の来観を希望している

1937（昭和12）年8月11日

松木満史氏洋画展 十、十一両日

洋画家松木満史氏の洋画個人展覧会は十日青森市菊屋デパートホールに於て開催されたが作品は未発表の油絵四十一点である、今回は松木氏多年念願していたパリ行きを控えているだけに非常な力作快作揃いで松木氏得意の馬、裸婦は勿論風景に静物に近来にない好展覧会である、尚同展は十日、十一日の二日間である

ここではこの個展の目的が伝えられている。松木は個展を開催して作品を販売し、パリ行きの費用の一部を賄おうとしていた。青森市に続いて、松木は同年10月に五所川原町でも個展を開催する。

1937（昭和12）年10月25日

松木満史画伯 五所川原で個展

洋画家松木満史氏は目下青森市栄町のアトリエにて画会作品製作に多忙を極めていますが、二十五日二十六日の二日間に亘つて五所川原町三好庵に於いて新作約三十余点を出陳、個人展覧会を開催することになった

この展覧会の様子を伝える記事は掲載されていないため、会場の様子や出品作等の詳細は不明である。これ以降、松木に関する記事はしばらく見当たらなくなる。次に松木が東奥日報紙上に登場するのは翌1938（昭和13）年である。以下では松木の渡仏が報じられている。

1938（昭和13）年7月23日

松木満史氏 今晚出発

洋画研究のために渡仏する西郡木造町出身洋画家松木満史氏は郷里における準備万端成つたので、二十三日午後十時青森駅出発、数日滞京の後三十一日横浜を出発することになった、松木氏の海外研究は約一ヶ年の予定であるが主としてフランスに滞在各地の古代及び現代美術に接し、更に現代の諸大家を訪問、自己の作品制作に資せんとするもので、帰途には洋画の発祥地たるイタリアの古美術を視察するはずであり、この間に於ける松木氏の収穫は一般から多大の期待を以て見られている

1938（昭和13）年8月6日

松木満史氏 マルセーユへ

西郡木造町出身洋画家松木満史氏は渡仏のため先に郷里を出発、四日照国丸で本土を後にしたが、同日松木氏から本社宛『一路マルセーユに船を進む、感謝する』旨の入電あつた

1938（昭和13）年9月12日

松木満史氏 仏国に上陸

洋画研究のため去る七月下旬青森を出発、八月四日神戸より一路フランスに向つた本県木造町出身洋画家松木満史氏は十日フランス・マルセーユに無事到着した旨本社に入電あつた

フランス上陸を伝えた後で再び記事は途絶える。約1年後、松木の帰国が報じられた。

1939（昭和14）年11月23日

松木満史氏 近く帰国

洋画研究のためフランスに滞在中の西郡木造町出身松木満史氏は、欧州動乱にも引きつづきパリに留まって研究を続けたい意向であつたが、駐仏日本大使館のすすめにより帰国を決意し、10月初旬ポルドー港を鹿島丸で百五十名の日本人と共に出発、一六日アメリカのニューヨークに到着、二十一日にはサンフランシスコに着き、ハワイを経て目下帰国の途上にあるが最近横浜上陸の予定である

翌月の記事では、不明だったフランス滞在時の活動が本人の口から語られている。

1939 (昭和14) 年12月5日

戦乱の欧州を避け 絵の旅松木画伯帰朝

[東京支局発]戦乱の欧州から四日横浜に入港した鹿島丸で松木満史画伯が帰朝した、午前八時ランチで港外に向った記者はタラップを上る先にはげ上がった頭、マドロスパイプの松木氏をデツキに見つけた、昨年七月三十一日今はなき照国丸で横浜港を出帆しスエズ、カイロを経由してマルセーユに上陸し

パリに第一歩を踏んだのは九月十七日、さうしてまる一年の本年九月十三日パリから難を逃れてボルドーへ、そこから二十五日出帆して英国のリヴァプールへ、更にニューヨーク、パナマを経て今朝懐かしの故国に帰つたのだ、相変わらずの津軽弁で欣喜雀躍左の通り語つた

パリについての昨年九月にもう風雲急を告げて市内は至るところ防空壕と砂囊で埋まつていた九月二十三日になるともう日本人会でも慌ただしい空気だった

宣戦が布告された本年九月三日に僕はパリから六十キロばかりのマントにいた、マントは美術家が多く住んでいたのが僕もここに二ヶ月ばかりいたが大使館から通知があつて

帰つたらどうかと云う話だ、マント市からパリには自動車も普通列車もない、辛うじて軍用列車でパリの郊外まで来たら降ろされて徒歩でパリ入りをした、その晩もう直ぐにも空襲かと覚悟していたがその晩は何事もなく四日目頃にサイレンで空襲警報が発せられ慌てて

防空壕に飛込んだ、或時はメトロへも避難した、パリからボルドーに出るに自動車は一萬法とられたのもいた、全く着の身着のままの有様でご覧の通りだ、リヴァプールでは一週間も足止めを食ったがホテルの食堂も切符だった然しアメリカを廻ったおかげでニューヨークの見物が出来て得したヨ、僕は然し絵は勉強したアカデミーコロラッチー¹⁾で画いた日、マントレクプリキャンと云う新聞のモサニー社長が良くしてくれて個展を連続的に開いて生活の目安もあつたので実はもう少し居たかつた、パリ日本美術展にも各派から六十人も出品したが僕は八点で

最高点となり首席賞を貰った、毎年賞に入るのは三人から五人程度だ、風景も画いたが人物の方がよいナー、自信もつた、未完成だが油絵五十点ばかり、デッサンは三、四百枚ばかりも持って帰った、明年五六月頃には東京で個展を開くつもりだ、フランスは美術に対して理解が深く、セザンヌの百年祭には記念切手が発行され

非常な賑いだつた、パリにはまだ二十人位日本人の画描きが残っているが僕ももう一度行きたいネ

と非常な元気であつた、栈橋にはこの朝上京した奥さんと井沼清七氏等が出迎え五、六日滞京挨拶まわりの上帰省の予定

松木に関する以上の報道は断片的であり、詳細な動向を伝えるものではないが、少なくとも最後の記事からは彼がフランスで一定の手応えを得て帰国したことがわかる。そしてこれ以後、宣言どおりに個展の開催など精力的に活動を展開していくことになるのである。

6 今後の課題

ここまで、松木の研究を行っていくに当たって、その方針や設定すべき時代区分、及び現時点での調査結果について述べてきた。「4 木造・青森時代について」と「5 渡仏期とその前後」でこれらの時期における松木の主な動向をまとめたが、ここから今後詳細に調査していくべきいくつかの事項が見えてきた。

木造・青森時代においては、まず土曜会の活動の詳細である。この会には松木をはじめ、竹内俊吉や棟方志功といった、後に青森県の文化界の中心となる人物が参加していた。のみならず、そこには主宰者である葛西新八郎が提供する『白樺』等、当時最新の文化情報や資料が集まっていた。彼らが具体的にどのような資料に触れていたのかを調査していくことで、これまで漠然と語られていた、松木が『白樺』から受けた影響の内容がはっきりしてくるであろう。

「新しき村」青森支部への参加についても、その詳しい経緯や淡谷悠藏との交流などを明らかにしていく必要がある。「新しき村」運動は武者小路実篤の著作等を通して全国に広まったとされているが、淡谷は具体的にどの著作に触れ、どのような理念に共鳴して青森支部を設立したのであろうか。また、松木はどうやって青森支部を知り、淡谷の元に住み込みで働いていたときにはどのようなことを学んだのであろうか。青森で開かれた「泰西美術複製展覧会」では具体的にどのような作品が展示されたのか。そして、来青した武者小路は青森の人々に何を語ったのか。このような点を調査することで、松木の画家としてのルーツに迫ることができるだろう。

渡仏期とその前後においては、なによりもフランス滞在時の活動を明らかにすることが必要である。現段階で松木のフランスでの活動を伝える資料は、本稿で紹介した新聞記事と現存するデッサン及び油彩画のみである。しかしこれらを出発点にすれば、その輪郭をある程度掴むことができるだろう。例えば記事の中で、松木は現地の日本人会に言及していた。このことは、松木が全くの独力でフランスでの生活を送っていたのではなく、日本人のコミュニティの中に所属し、そこから何らかの支援を受けていた可能性を示唆している。この日本人会を同定し、そこに所属していた日本人が明らかにできれば、フランスでの松木の人的ネットワークを多少なりとも把握することができるだろう。

このほか、他の時期における活動についても、現存する資料を起点に調査を進め、情報が不足する部分については周辺の事象を参照することにより補完しながら、松木の画業を一つ一つ記述していきたい。

- 3) 例えば、對島恵美子氏は東奥日報紙の紙面調査をもとに、志功が主宰した洋画団体「青光画社」の設立メンバーに松木を含めることに疑問を提示している。對島恵美子「「青光画社」考—棟方志功生誕百年にちなんで」、『青森県立郷土館調査研究年報』第28号、青森県立郷土館、2004年、75～88頁。
- 4) 『松木満史作品集』の年譜では渡仏は1938（昭和13）年6月とされているが、後述するとおり、東奥日報紙によると実際の出発は同年7月23日であった。『東奥日報』、1938（昭和13）年7月23日。
- 5) 長部日出雄『鬼が来た：棟方志功伝（上）』、文藝春秋、1979年（1999年に学陽書房から再刊。本稿ではこれを参照した。152頁）。
- 6) 對島恵美子「大正時代の青森の美術団体について」、『青森県立郷土館研究紀要』第35号、青森県立郷土館、2011年、122頁。
- 7) 東奥日報社編『青森県人名事典』、2002年、142頁。
- 8) 竹内俊吉「「折々の記」より」、『棟方志功記念館10年のあゆみ』、財団法人棟方志功記念館、1986年、11頁。1980年1月3日付け東奥日報より転載。
- 9) 以下、引用する新聞記事の日付は本文中に記載する。なお、漢字の旧字体は新字体に改め、かなの表記及び文章の改行は記事原文のままとしている。
- 10) 一般財団法人新しき村ホームページを参照。<http://www.atarashiki-mura.or.jp>
- 11) これは恐らくアカデミー・コラロッシ Académie Colarossi のことであろう。アカデミー・コラロッシは黒田清輝がラファエル・コランから指導を受けていた画学校として知られる。なお、『松木満史作品集』の年譜には、松木が「コラロシェグラン、ショミエールに学」んだと記されているが、松木が学んだのがアカデミー・コラロッシであったとすると、「コラロシェ、グランショミエール」とするのが適切であろう。グランショミエールとは、アカデミー・ド・ラ・グランド・ショミエール Académie de la Grande Chaumière のことであると思われる。こちらはモンパルナスにおいて中心的な役割を果たした画学校である。

脚注に記載した以外の参考文献

- 松木リョウ編『松木満史画集』、松木満史画集刊行会、1979年
長部日出雄『鬼が来た：棟方志功伝（下）』、文藝春秋、1979年；学陽書房、1999年
青森県立郷土館『松木満史とその時代展』、1991年
中畑長四郎『津軽の美術史』、北方新社、1991年
青森県史編さん文化財部会編『青森県史 文化財編 美術工芸』、青森県、2010年
青森県環境生活部 県民生活文化課 県史編さんグループ編『青森県史叢書 近現代の美術家』、青森県、2012年